



みなとからの風

〒231-8682 横浜市中区新山下3-12-1 / TEL 045-628-6100(代)
http://www.yokohama.jrc.or.jp/

●発行：2018年9月 医療連携センター

Contents

P1 ●当院の「がんセンター」と「がん診療」のご案内
P2 ●救命救急センターよりごあいさつ
P3 ●呼吸器病センターの診療体制

P4 ●皮膚灌流圧(SPP)測定装置の導入と講演会
開催のご案内

当院の「がんセンター」と「がん診療」のご案内

がんセンター長 山本 晃

2018年4月より、がんセンター長を務めております山本晃(こう)です。当院の「がんセンター」の活動と「がん診療」の特徴についてご説明します。

がん患者さんの診療には身体的、精神的な問題のほかに、食事、介護、ADL、就労、医療費、生活費などの多彩な問題が起きて、以前の日常生活が難しくなります。これらの問題を解決するためには、がんを扱う全ての診療科、部門の多職種スタッフのチーム医療に加えて、地域医療機関の皆様との連携が重要と思います。

当院ではがん診療の充実のために、2011年に院内組織である「がんセンター」を設置し、組織横断的にがん診療を向上させて、チーム医療や地域連携を推進するエンジンとなっています。

院内の活動としては、チーム医療を向上させるための複数の診療科と多職種スタッフによるカンサーボード、緩和ケアチーム、口腔ケアチーム、栄養サポートチーム、がんのリハビリ、がん相談支援センター、患者さん・ご家族向けのみならずサロンや患者会支援などを行っています。また、がん診療に関する様々なテーマを扱うがんセンター講演会、勉強会、緩和ケア研修会を行って最新の情報を広め、がん診療の資格の取得や多施設共同臨床試験への参加を進めています。

さらに院外での活動として、横浜・川崎がん病連携会の講演会と市民公開講座、緩和ケア・がんの栄養・がんのリハビリなど部署・職種ごとの連携機関との勉強会、県立がんセンターや地域がん診療連携拠点病院との協議会を定期的に行い、地域全体のがん診療を充実させ、顔の見える関係を作るようにしています。

患者さんや医療機関の皆様にご案内の情報をわか

りやすくお伝えするため、病院のホームページを改訂しました。例えば、図のようなイラストを使って、何科にかかればよいのか簡単にわかるようにしました。当院ホームページ、トップ画面の「がん診療のご案内」をぜひご覧ください。

当院のがん診療の特徴は、次の通りです。

- ①地域がん診療連携拠点病院として「専門的ながん医療」および「がん相談」などを提供し、がん患者さんの「生きる」を支援します。
- ②PET/CT、高画質の3テスラMRI、低侵襲手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入し、質の高い医療を目指しています。
- ③スピーディーな検査、入院、退院を目指し、検査や治療の待ち時間を減らし、できるだけ早く治療を始めて、短時間で退院できるようにします。
- ④がん早期発見の健診センターから、幅広いがんの予防・診断・治療、そして緩和医療まで、切れ目のないがん治療を提供いたします。
- ⑤がんを治すだけでなく、治療を受けられる患者さんを、チーム医療、がん相談支援センター、がんサロン等でサポートし、1人1人の生活に寄り添った治療をします。

PET/CTやMRIなどは、院外からの共同利用が可能です。詳細はトップ画面の「がん診療のご案内」をご覧ください。また参加可能な講演会については、ホームページの「お知らせ」でご案内しておりますので、ぜひご活用ください。

がん患者さんとお家族ができるだけ快適に生活できることを目指して、地域の皆様と連携し、スタッフがチームとなって精進し、がん診療の向上に貢献したいと思います。今後とも当院のがん診療、がんセンターについてよりしくお願い致します。



山本センター長とがんセンター管理室スタッフ



病院ホームページのトップ画面に「がん診療のご案内」を作りました。

救命救急センターよりごあいさつ

【ごあいさつ】

当院は 2005 年に開院して以来、一貫して積極的に救急車の受け入れを行ってきました。救命救急センターとして認可されたのは 2009 年で、まだ歴史の浅いセンターです。伊藤敏孝初代救急部長と私の 2 名で始まった救急部・集中治療部の運営は、現在は全国各地から医局に所属せずに集まった約 20 名の救急医、集中治療医により支えられています。開院より一貫して「断らない救急」を実践し、現在では年間約 12,000 台の救急車を、特別な事情がない限り断ることなく受け入れ続け（図 1）、断り率は 1%前後で推移しています。

初代救命救急センター長は八木啓一先生で、鳥取大学の救急医学講座の教授を辞して当院に赴任されました。2018 年 3 月に八木先生が退職され、4 月より僭越ながら私がセンター長を引き継がせていただいております。何かと至らぬ点も多いかと存じますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

【センターの 1 日】

<8:15> 救命救急センターの 1 日は、1 階の ER における救急医の引き継ぎから始まります。

<8:30> 3 階の ICU で多職種回診が始まります。参加者は持松副院長をはじめ、救命救急センター、麻酔科、心臓血管外科などの様々な診療科の医師のみならず、薬剤師など多職種にわたり、その数実に約 20 名におよびます（図 2）。ICU 回診後は救命救急センター医師と薬剤師は救急病棟を回診し、最後にチームに分かれて一般病棟回診を行います。当院救命救急センターは、比較的多くの患者を退院までみており、総合診療科の色彩が強いのが特徴です。

<9:10> 朝の回診を終えると、救急医は ER へ、集中治療医は ICU へと移動し、それぞれの持ち場での仕事が始まります。ER では、1 日平均 30 台～40 台の救急車に対応します。ときに 1 時間あたり 5 台をこえる救急車に対応をする時間帯があり、さながら現場は災害モードのようになることがあります。

<13:00> 救命救急センター医師、薬剤師によるカンファレンスが行われます。新入院紹介、その日に行った画像検査などの結果と今後の治療方針の確認、困難な問題の相談などが行われます。週に 2 回は感染症内科医師が、週に 1 回は精神科医師が参加し、感染症や精神疾患を有する患者の診療について相談します。

<17:15> 救命救急センター医師による夕回診と当直医への申し送りが行われます。

救命救急センター センター長 武居 哲洋

<その他> レジデント教育の目的で、ER 症例のピットフォールや TIPS をフィードバックするセミナー、英文医学誌抄読会、ER/ICU 症例検討会などを定期的に行っています。また、Rapid Response System（院内急変対応）や中心静脈カテーテルライセンス制度を主導し、患者安全管理において重要な役割を果たしています。

【今後の抱負】

地域医療のセーフティネットとして機能する「断らない救急」の方針を、今後とも堅持していききたいと思います。働き方改革等、解決すべき難問は山積していますが、急性期総合病院の救命救急センターに求められる役割を果たしていきたいと思います。

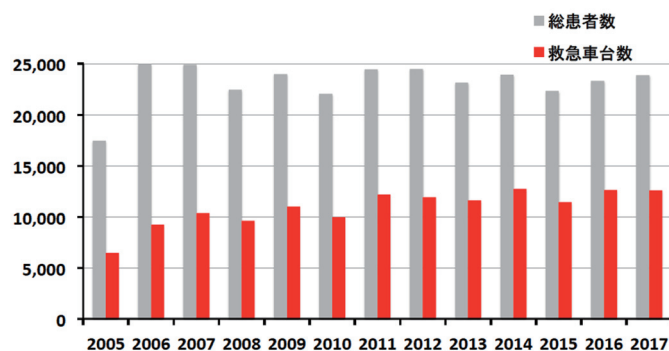


図1 救急車受け入れ台数の推移

開院より救急患者の受け入れにこだわり続け、現在では年間約 12,000 台の救急車受け入れ要請を、ほぼ断ることなく応需している。



図2 朝の ICU 多職種回診

朝の ICU 回診は、救命救急センター医師のみならず、様々な診療科の医師やコメディカルを含め、およそ 20 名が参加する。

呼吸器病センターの診療体制

呼吸器内科 部長 河崎 勉

2018年より、呼吸器病センターの体制をとることとなり、呼吸器内科と呼吸器外科が連携を強化して呼吸器疾患の患者さんに、より質の高い集学的医療を行っております。特に肺がんの診断・治療に力を入れております。呼吸器病センターに受診・御紹介いただきますと、肺がんの診断を内科と外科で連携して行い、手術や内科治療を当該科で速やかに行うように努めております。

呼吸器病センターは、現在8人体制(呼吸器内科7名、呼吸器外科1名)で診療をしております。なかでも 3名の日本がん治療認定医機構がん治療認定医が肺がん診療にあたっております。さらに日本呼吸器学会呼吸器専門医5名、指導医2名が在籍しております。また呼吸器外科専門医が、侵襲性の低い胸腔鏡を用いたハイブリッド手術を積極的に行っております。その他、気管支鏡専門医2名、日本アレルギー学会専門医3名、指導医1名が在籍しており、呼吸器疾患の専門家による質の高い診療体制を整えております。

また、発生頻度が少ない遺伝子異常の肺がん全国調査である LC-SCRUM-Japanにも参加し、最先端の医療にも関わっております。

診療している呼吸器疾患は、肺炎が最も多いものの肺がんや間質性肺炎、慢性閉塞性肺疾患 (COPD)、気管支喘息、気胸、転移性肺腫瘍、縦隔胸壁腫瘍など多岐にわたっており、各疾患における最新のガイドラインに基づいたエビデンスレベルの高い診療を心掛けております。

呼吸器内科では、肺がんの診療において、PET/CTを積極的に用いた精度の高い診断と、がん免疫療法(免疫チェックポイント阻害薬)や分子標的薬を用いた最新の化学療法レジメンに対応した治療を行っております。また、横浜市の肺がん検診において、二次読影を当院医師が担当しております。呼吸器外科では、術前検査は外来で行っており、入院期間は肺がんで術後4-7日、若年者自然気胸で術後2-3日となっております。肺がん手術等では、リハビリテーション科による術前後の呼吸訓練を組み込んだクリニカルパスを導入しており、周術期の管理に活用しています。さらに放射線科や緩和ケア内科と綿密に打ち合わせをし、放射線療法や専門的緩和ケアを行っております。健診センターの肺がん検診読影も行っており、禁煙外来と合わせ、肺がんの予防から健診、診断、内科治療、手術、放射線治療、緩和ケアと一貫した肺がん対応が、当院のみで可能です。

呼吸器病センターとなり、これまで以上に地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



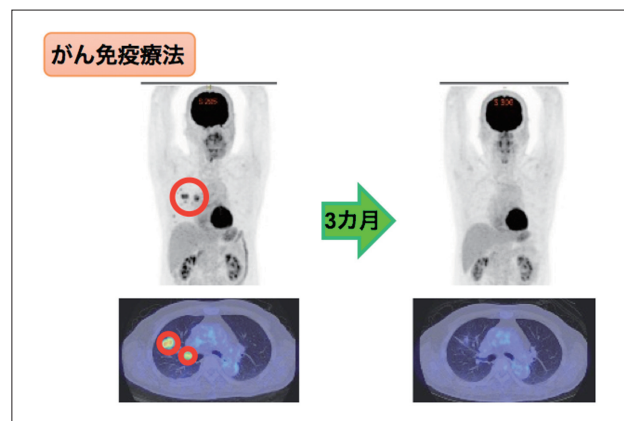
呼吸器内科
鶴浦副部長

呼吸器内科
河崎部長

呼吸器外科
下山部長

呼吸器内科
岡安副部長

呼吸器病センター スタッフ



当院でのがん免疫療法著効例
(赤丸の中が、肺がん病変)



ハイブリッド手術

皮膚灌流圧(SPP)測定装置の導入と講演会開催のご案内

形成外科 部長 横山 明子

近年、糖尿病患者、透析患者の増加に伴い閉塞性動脈硬化症から末梢動脈疾患(PAD)、重症下肢虚血(CLI)となる患者が増加しております。当院では糖尿病内分泌内科と腎臓内科が糖尿病患者、透析患者の診療を行っており、PAD、CLIを生じた場合には循環器内科、心臓血管外科で血行再建を行い、皮膚科、形成外科、整形外科で創管理や手術などを担当しております。

当院ではこのたび、SPP測定装置(PAD4000、カナメディックス社)を導入することとなりました。SPP測定装置は、非侵襲的に血流を評価する装置で、PADの診断、難治性潰瘍の血流評価、虚血性潰瘍の治癒予測、血行再建術のモニタリング、下肢切断レベルの判定などに有用です。今までも各科が協力して治療を行って参りましたが、SPP機器の導入により、各診療科の連携がさらに深まることが期待されます。

機器の導入にあたり、機器の紹介、CLI診療に関わる講演会(みなとセミナー)を11/28(水)に開催いたします。講師にお招きするのは神戸大学・形成外科教授寺師浩人先生です。寺師先生は糖尿病性足潰瘍の「神戸分類」を提唱され、「糖尿病性足潰瘍の100例」(克誠堂出版)を執筆されるなど、足潰瘍治療に非常に造詣の深い先生です。また、単にキズを治す、足を残すのではなく、歩行を守る事が大事であると常々お話しされています。今回の講演会でも、足潰瘍の治療や歩行を守るために実践されていることなどをご講演いただく予定です。

糖尿病、人工透析、足潰瘍、PAD、CLIの診療に携わる医師、看護師、コメディカルが、それぞれの立場で何ができるのか、是非講演会にご出席いただき、学びを深めていただきたいと思います。

PAD4000



SPP 測定のイメージ



紹介患者さんのお問い合わせご予約は医療連携課で承ります

電話 045-628-6365(直通) / FAX 045-628-6367(直通FAX) 受付時間 平日 8:30~17:00



日本赤十字社

横浜市立みなと赤十字病院

〒231-8682 神奈川県横浜市中区新山下3丁目12番1号
TEL:045-628-6100(代表) FAX:045-628-6101



<http://www.yokohama.jrc.or.jp/>

みなと赤十字

病院ホームページ

検索

